

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00834

研究課題名(和文) 出雲赤穴氏関係史料から探る中世後期武家領主の存在形態と行動様式

研究課題名(英文) Existence and behavioral patterns of late medieval military lords explored from historical materials related to the Izumo Akana clan

研究代表者

川岡 勉 (Kawaoka, Tsutomu)

愛媛大学・教育学部・研究員

研究者番号：90186057

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世出雲の山間領主であった赤穴氏の関係史料を手がかりに、中世後期の権力秩序の中における武家領主の位置づけに留意しながら、彼らの存在形態と行動様式の特徴について考察を加えた。主たる研究対象は、出雲の赤穴氏およびその惣領家である石見の佐波氏であり、前者は守護京極氏の被官人として、後者は室町幕府の奉公衆として、変動する社会状況にどう対応し、生き残りを図ったかを究明した。

考察を深めるために、下野茂木氏・備後因島村上氏・安芸竹原小早川氏・石見益田氏・筑前麻生氏についても史料を収集し、赤穴氏・佐波氏との比較対照を試みた。また、大内氏分国における段銭収取システムと知行制についても分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「赤穴郡連置文」は、室町から戦国への移行期における武家領主のあり方を考える上で希少な史料であり、その作成事情を分析する中で、作成目的や背後関係を浮かび上がらせることができた。置文の内容分析からは、武家領主の存在形態や行動様式が一般的なものでなく、幕府・守護系列を基軸とする国郡支配関係と、惣領家との間で取り結ばれる惣庶関係のはざままで微妙に揺れ動く姿を、権力状況の変動と結びつけて具体的に描き出した。

武家領主の権力編成と役負担のあり方について、広く目配りして論述したのも重要な研究成果である。大内氏分国の段銭収取システムに関する研究とともに、中世後期の役負担体系のあり方を問い直す意義をもつと言える。

研究成果の概要(英文)：This study uses historical materials related to the Akana clan, a mountain lord in medieval Izumo, to examine the characteristics of their form of existence and behavior, while paying attention to the position of military lords in the power order of the late medieval period. The main research subjects are the Akana clan of Izumo and their soryo family, the Sawa clan of Iwami. The former as a retainer of the Shugo Kyogoku clan, and the latter as a servant of the Muromachi shogunate, how did they respond to changing social conditions, we investigated how they tried to survive.

In order to deepen our analysis, we also collected historical materials regarding the Shimotsuke Motegi clan, the Bingo Innoshima Murakami clan, the Aki Takehara Kobayakawa clan, the Iwami Masuda clan, and the Chikuzen Aso clan, and attempted to compare them with the Akana clan and the Sawa clan. We also analyzed the tansen collection system and chigyo system in the Ouchi clan's bunkoku.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世 武家領主 存在形態 行動様式

1. 研究開始当初の背景

中世後期の武家領主については、国人領主制論を中心に研究が展開してきた。これは中世後期の在地領主を国人領主と捉え、領主制の発展過程として中世後期を把握しようとするものであり、所領支配の構造分析を中心に領主層の存在形態の解明が試みられた。しかし、国人領主制論では室町幕府 守護体制を基軸に成り立っている中世後期の武家権力秩序の中に武家領主を位置づけようとする視点は希薄であり、武家領主の社会的地位をトータルに把握できていない。一方、史料にみえる「国人」が政治的地位を示す用語であるとする石田晴男氏は、これを幕府の御家人と捉える見方を示したが、国人が守護に奉仕するケースもあることからみて、この理解は修正が必要である。

史料上、国人と対比されるのは守護被官であり、中世後期の武家領主を国人と守護被官に区分した上で、両者が幕府 守護体制とどのような関係を取り結んでいたかを具体的に突き詰める作業が求められていた。

2. 研究の目的

本研究は、中世後期の武家領主（国人・守護被官）の存在形態と行動様式はいかなるものであったかを、室町幕府 守護体制と関連づけて、また室町期から戦国期への移行する政治社会状況と結びつけながら探ろうとしたものである。主たる分析対象としたのは、出雲国飯石郡の領主である赤穴氏と、隣接する石見国邑智郡に拠点を置き赤穴氏の惣領家に当たる佐波氏である。前者は守護京極氏の被官人として、後者は幕府の奉公衆を務める国人として活動しており、それぞれの性格の差異に留意しながら、前掲の課題にアプローチしようとした。

3. 研究の方法

赤穴氏は157通におよぶ中世文書を伝えており、なかでも永正2年（1505）の「赤穴郡連置文」は、室町期から戦国期への移行過程における武家領主のあり方を考える上で希少な史料である。本研究は郡連置文をはじめとする赤穴氏伝来史料を中核に、守護である京極氏の関係史料、そして奉公衆である佐波氏の関係史料を収集・分析するとともに、赤穴荘・佐波郷の故地におけるフィールド調査を組み合わせることで武家領主の存在形態と行動様式を総合的に読み解くように努めた。また、考察を深めるために、下野茂木氏・備後因島村上氏・安芸竹原小早川氏・石見益田氏・筑前麻生氏などについても史料収集と現地調査を実施し、赤穴氏・佐波氏との比較対照を試みた。

4. 研究成果

(1) 「赤穴郡連置文」の成立事情を分析し、その作成目的および背後関係について検討を加えた結果、出雲国内の権力秩序のあり方が転換し、京極氏の勢力が後退する中であって、惣領佐波氏に対する赤穴氏の忠節を強調し、関係強化を図ろうとするために作成されたものであったことを明らかにした。

- (2) 「赤穴郡連置文」の記載内容を読み解くことによって、武家領主の存在形態や行動様式が一様なものではなく、幕府 守護系列を基軸とする国郡支配と、惣領家との間で取り結ばれる惣庶関係のはざままで微妙に揺れ動く姿を具体的に描き出した。
- (3) 赤穴氏の関係史料などを手がかりにして、守護京極氏による出雲支配の構造や変遷を総括的に論述した『室町時代の出雲と京極氏』(松江市歴史まちづくり部史料調査課)を刊行した。
- (4) 室町期から戦国期へと移行し、京極氏に代わって尼子氏が台頭する中で、赤穴氏は尼子氏に国並奉公をし、佐波氏は大内氏と結びつくというように、それぞれ戦国期守護権力に組織される道を歩んでいくことを跡付けた。
- (5) 赤穴氏関係史料のうち「沙弥賢栄置文」を中心に武家領主の権力編成と役負担のあり方を検討した上で、他の武家領主の史料にも広く目配りして中世後期の役負担体系の特質について考察を加えた。これと関連して、大内氏分国における段銭収取システムの構造も明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川岡勉	4. 巻 55
2. 論文標題 戦国大名論から戦国期守護論へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史友	6. 最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川岡勉	4. 巻 21
2. 論文標題 戦国期出雲における権力秩序の変動と「赤穴郡連置文」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 資料学の方法を探る	6. 最初と最後の頁 1～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川岡勉	4. 巻 15
2. 論文標題 南北朝期の出雲と義清流佐々木氏 隠岐・塩冶・富田氏を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 松江市歴史叢書	6. 最初と最後の頁 1～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川岡勉	4. 巻 28
2. 論文標題 大内氏の石見支配と吉見氏	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根県古代文化センター研究論集	6. 最初と最後の頁 33～45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川岡勉	4. 巻 292
2. 論文標題 書評・前田徹『中世後期播磨の国人と赤松氏』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 55～62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川岡勉
2. 発表標題 戦国大名論から戦国期守護論へ
3. 学会等名 青山学院大学 史学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 川岡勉	4. 発行年 2023年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 415
3. 書名 戦国期守護権力の研究	

1. 著者名 志賀節子，高木純一，永松圭子，辰田芳雄，永山愛，松井直人，長崎健吾，三枝暁子，石川美咲，馬部隆弘，伊藤大貴，吉永隆記，川岡勉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 214
3. 書名 日本中世の課税制度	

1. 著者名 川岡勉, 片桐昭彦, 石川美咲, 新谷和之, 小谷利明, 野田泰三, 佐々木倫朗, 古野貢, 岡村吉彦, 大石泰史, 岡田謙一, 山田貴司, 新名一仁	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 550
3. 書名 中世後期の守護と文書システム	

1. 著者名 川岡勉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松江市歴史まちづくり部史料調査課	5. 総ページ数 112
3. 書名 室町時代の出雲と京極氏	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------